



DXからジャーヴィスへ

副社長 佐藤 朋由

私とデジタルとの出会いは、学生時代、境界要素法を用いて、棒鋼の破断解析を行っていた頃に遡ります。当時のコンピュータはFORTRANを用い、データはカードにパンチで穴を開けて機械に読み込ませるので、ものすごいカード枚数になり読み込ませるのにも苦労したものです。運んでいる最中に落としたりしたら並べ直すのに苦労し、もう最悪でした。

ですが、その頃感じていたのは、コンピュータは何でもできるということ、データを情報化すれば不可能な事は無いということでした。それが今や携帯電話でさえ、あの頃のコンピュータの能力をはるかに超えており、何でも出来る時代が近づいてきた感があります。

今、未来に目を向けた時にDX (Digital Transformation)と聞いて想像するのは、有名なアベンジャーズ映画のアイアンマンに出てくるジャーヴィス(J.A.R.V.I.S.: Just A Rather Very Intelligent System)です。主人公トニースタークの要求にこたえて、世界中の知識を瞬時に呼び出し、瞬時に解析して彼なりの提案をする。時にはご機嫌を取ろうとコーヒーを入れて、逆にトニーから不味さを叱咤される。我々の行動は全て情報によって支配されています。そして情報の世界であれば不可能なことがないコンピュータはどんどん進化している。ジャーヴィスの世界はそう遠くはないと感じています。余談ですが、最後にジャーヴィスは人間みたいな姿になるんですけどね。

その様なDXの姿を目指すために、今やりたいことは大きく3つです。

1つ目は、今を変えるDigitizationから未来を創るDigitalizationに繋げていくこと。データの関連/連続性が見えたら予知/予兆に繋げていき、新しい知恵を見出していく。3Dデータと現実をコリレーションさせ、デジタルツインが実現できれば、新しい価値が見いだせるかもしれません。常識やルーティン作業を見直し、大幅に効率化し、更に新しい価値を、新しい知恵を見出し続けていくことが重要です。

2つ目は、技術は自前でつくること。現実・現物・現場の3現は我々の強みそのものであり、その3現に基づく新しい知恵と価値は我々にしか作りえないものです。それこそが我々の競

争力の源泉、社外でも通用する価値になるのだと思います。例えば、RPA (Robotic Process Automation) は全て内製で既に100体以上稼働中であり、各々が新しい知恵や価値を生み出しつつあります。

それらは、自らの現実と繋がった自前のものであるからこそ、より高い価値が生まれるのだと思います。

3つ目は、それらを支える人と仕組みをつくり上げることです。今年度からデジタル・イノベーション推進部を組織しました。しかしながら彼らはあくまで黒子であり、主役は現実・現物・現場を持つ各部門・部署です。彼らは各部門・部署のDXをサポートし、社内で統一すべきツールを明確にしたり、新たなデジタル技術導入を支援したり、社員のDXレベルの向上を企画したりすることが大きな役目です。少人数で我々の将来のDXの姿を描きながら、全社をリードしていくそんなチームです。

以上3つ、デジタル・イノベーション推進部のリードのもと、可能な限り自前でDigitalizationを進めて、我が社なりの新しい知恵と価値を見出していくのです。

自動車業界が100年に一度の大きな変革期を迎えていることは、皆さん周知の事実ですね。

我々もそれを変革の好機としてチャレンジします。メカトロニクスだけではなくエレクトロニクスをもっと身近にし、商品そしてサービスをDigitalizationし、お客様に新たな知恵と価値を提供していく。先に述べた、ジャーヴィスのように現実を情報と繋げ、お客様に新しいジヤトコの価値を常に提供し続ける。我々が世に送り出す商品もそうありたいと思っています。そんな未来を描き、夢見ながらジヤトコのDXをリードしていければと思っています。